

幼稚園児の母親の親役割意識

——質問紙記述回答の分析から——

服部 沙織*

Awareness of Parental Roles in the Kindergarten Period:
Descriptive Questionnaire Surveys on Mothers of Kindergartners

HATTORI Saori

キーワード：親役割, 幼稚園, 愛着, 安全基地

Parental Role, Kindergarten, Attachment, Secure Base

1. 研究の背景と目的

親役割は、母親たちの生き方や育児ストレスに影響を与える。大日向¹⁾は、母親役割が女性の生き方を呪縛し、子育て中の母親を追い詰める要因になっていると指摘している。また徳田²⁾は、育児ストレスは子どもの育ちや行動特徴といった子どもの個の問題以上に、親に期待される親役割の遂行や生活上の制約、親自身の自信や効力感と密接に関わっていることを明らかにした。さらに近年、Moiraら³⁾の研究によって、親役割の問題が子育てにおけるバーンアウト（以下、子育てバーンアウト⁴⁾）の危険因子の1つであることが明らかになった。

親役割や子育てに関する親の意識は、社会からの影響を受ける。ベネッセ総合研究所が実施した第6回幼児の生活アンケートの「母親の子育て意識」⁵⁾によると、2015年の調査から2022年までの5年間で「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」の項目が幼稚園児の母親、保育園児の母親ともに大幅に増加している。そのなかでも特に保育園児の母親よりも幼稚園児の母親の増加幅が大きく、幼稚園児の母親において育児

による束縛感が増していると同調査で推察されている。また、楠本⁶⁾は、専業主婦は就業者よりも親役割の否定意識が高いことを明らかにしており、「育児に携わっている間に、世の中から取り残されているように思う」といったストレスを母親たちは感じていると指摘している。

子どもを幼稚園に通わせている母親は専業主婦が多く、家庭で子育てに専念している傾向があると吉本⁷⁾は述べている。保育所に比べて幼稚園は在園時間が短いという特色があり、幼稚園を利用しているのは主に母親が専業主婦の家庭または、母親がパートタイム就労の家庭である場合が多い。近年、女性活躍が推進されて育児と仕事を両立する母親が増加した影響で、家庭で育児に専念する傾向がある幼稚園児の母親に親役割意識の観点から葛藤が起こり、負担感や束縛感が強まっている懸念がある。よって、親役割意識を考慮して子育て支援をするためには、幼稚園児の母親たちが実際に意識している親役割の具体的な内容や親役割についての考えを明らかにする必要がある。

船橋⁸⁾は、親役割は「扶養」、「社会化」、「交流」、「世話」だとしている。寺蘭はこれらをふまえて調査⁹⁾を実施し、「子育て期母親役割尺度¹⁰⁾」を開発した。この「子

* 愛知県立大学大学院人間発達学研究科博士後期課程在籍

育て期母親役割尺度」は、「子どもの発達を促すかわり」、「基本的生活習慣の確立に向けての援助」、「社会生活に向けての教育」、「子育てや教育に関する費用の管理」の4つの因子から構成されている。しかし、この調査は幼稚園と保育園の0歳から5歳の子どもがいる母親を対象としており、幼稚園児の母親の親役割意識の特色を知るためには、対象を幼稚園児の母親に限定する必要があると考える。また、この尺度の予備調査⁹⁾は2011年に実施されており、先述の第6回幼児の生活アンケート⁵⁾で2015年から2022年の間に母親の子育て意識に変化があったことを鑑みると母親たちの親役割にも変化がある可能性が考えられる。

一方、時代による親役割意識の変化だけでなく、子どもの幼稚園生活をフォローするなかで親役割意識の変化があることも考えられる。服部¹¹⁾が幼稚園卒園児の母親を対象に幼稚園時代を振り返るインタビュー調査を実施したところ、幼稚園の3年間で母親たちの親役割意識に変化がみられた。しかしこの調査は3人の母親を対象としているため幼稚園児の母親の親役割の傾向を知るためにはより多い母親を対象とした調査が必要である。また、前述の寺藺の調査⁹⁾では子どもの年代による親役割意識の違いは明らかになっていないため、子どもの年代の違いに着目した調査も必要であると考えられる。

そこで本研究では現代の幼稚園児の母親たちが意識している親役割(以下、親役割意識)の特色を明らかにする。そのために、本研究では子どもを幼稚園に通わせている母親に記述回答式の質問紙調査を実施し、次の4つについて検討したい。①現代の幼稚園児の母親たちは親役割をどのように意識しているのか、②年少児の母親(以下、年少母)と年長児の母親(以下、年長母)の親役割意識には違いがあるのか、③寺藺¹⁰⁾が見出した4つの母親役割との違いがあるか、④母親たちは親役割についてどんな意見を持っているのか。

地域コミュニティや親族による育児の手助けが乏しい現代において、幼稚園は子育て支援の拠点としても重要な役割を担っている。母親たちの親役割意識の実情を明らかにすることは母親たちの育児ストレスの軽減や子育てバーンアウトの予防につながり、幼稚園や地域での子育て支援の重要な土台になると考える。

なお、住田ら¹²⁾によると幼児の父親と母親では認識

している育児行為が異なる傾向が明らかになっており、本研究では母親のみを対象とする。

2. 研究方法

1) 質問対象

愛知県のA幼稚園とB幼稚園に子どもを通わせている年少母と年長母を対象として質問紙調査を実施した。いずれの幼稚園も3歳4月年少入園前の3歳児クラスや不定期の親子登園によるプレ幼稚園の機会を有するが、3歳4月からの3年保育のカリキュラムを基本とした私立幼稚園である。

入園時点と卒園時点での親役割の違いを明らかにするために年少母は2021年6月下旬、年長母は2021年1月下旬～2月上旬に質問紙調査を実施した。年少母については5月上旬に実施する予定だったが、COVID-19の感染拡大により緊急事態宣言が発令されたため、緊急事態宣言が解除された6月下旬に実施した。

なお、本調査は複数の調査項目をまとめて1つの質問紙にしたものの一部として実施した。

2) 方法

本研究では、分析Ⅰと分析Ⅱの2つの分析を行う。分析Ⅰでは、幼稚園児の母親の親役割意識を母親たちの記述回答から具体的に明らかにし、年少母と年長母の違いを比較する。分析Ⅱでは、幼稚園児の母親が親役割についてどのような意見を持っているのかを記述から分析する。

記述回答の内容は意味を持つ最小単位に分割して切片として「親役割意識」と「親役割に関する意見」に分類し、分析Ⅰと分析Ⅱで分けて用いる。それぞれの分析方法を以下に記す。

分析Ⅰ 生成された切片のうち、「親役割意識」に分類されたものを用いて、以下の作業を行う。

1. 生成された切片を類似性に基づき分類してカテゴリを生成し、意味内容にふさわしい名称を設定する。

2. 内容的に共通の概念で括ることができる複数のカテゴリーを大カテゴリーとしてまとめ、意味内容にふさわしい名称を設定する。

3. 生成された大カテゴリーに該当する記述の数と全記述数に対する割合を算出する。

これらを記述するにあたり、カテゴリーを〔 〕、大カテゴリーを【 】で示す。カテゴリー名の命名に関しては、寺藪¹⁰⁾の「子育て期母親役割尺度」(表1)の因子名も参考にする。なお、「子育て期母親役割尺度」の本論文への掲載については、作成者の寺藪より承諾を得ている。

分析Ⅱ 生成された切片のうち、「親役割に関する意見」に分類されたものを用いる。分類された親役割に関

する意見のうち。育児ストレスや子育てバーンアウトにつながりうるネガティブな意見や葛藤がみられる意見を抽出し、考察を行う

なお、分析Ⅰ、分析Ⅱともに、結果の信頼性と妥当性を高めるために発達心理学を専門とする研究者と協議しつつ分析を行い、保育学を専門とする研究者のチェックを受けた。

表1 子育て期母親役割尺度

<p>因子Ⅰ「子どもの発達を促すかわり」：17項目 子どもの行動に対し、長い目で見守る 子どもが悪いことをした時、感情的にならないよう気をつける 子どもの気分が落ち着かないと思った時は、気分転換を図る 子どもの思いを十分に受け止める 子どもの思いに寄り添ったり、共感したりする いつも笑顔で子どもを見守り、子どもが安心して過ごせる環境をつくる 子どもとかかわる時は、冷静な態度を心がける 子どもがイライラしたり、怒っていると思った時は落ち着くまで見守る しつけ場面では、子どもの視点に立って説明する しつけも教育もとにかく子どもに目を向ける 悪い面ばかりに目を向けず、良い面をしっかりほめて伸ばしていく 子どもが不安そうだなと思った時は、子どもが落ち着くまで抱きしめる 子どもの自主性を育むよう、子どものしたい気持ちを大切に 親が子どものお手本となるような行動を心がける 子どもの発達に応じた教育をする 子どもといっしょに遊ぶ時は、いっしょに楽しむ 子どもが泣いている時、子どもの話を聞き、いっしょに理由を考えたり、どうしたらよいかを考えたりする</p>
<p>因子Ⅱ「基本的生活習慣の確立に向けての援助」：11項目 入浴や歯磨きなど、できることは見守り、発達に合わせて手伝う 子どもが一人で食事が食べられるように、発達に合わせて手助けをする 子どもが一人で着替えができるように、発達に合わせて手助けをする 入浴や歯みがきなど、きれいにすることの気持ちよさを楽しく伝える 子どもに食事をする時のマナーを教える 子どもの発達に合わせて、排泄の手助けをする 食べ物の好き嫌いがなくなるよう、調理方法を工夫したり、料理をアレンジしたりする 食事は子どもが楽しく、おいしく食べられるよう工夫する 身の回りの自立ができるよう、子どもの発達状況に合わせて手助けをする 子どもの健やかな発育を考えて、栄養のバランスのとれた食事をつくる 健康のために生活リズムを整える</p>
<p>因子Ⅲ「社会生活に向けての教育」：4項目 子どもが他の人に対して良いことや悪いことをした時、相手の気持ちを伝え、思いやりや共感する気持ちを育む 子どもが社会に出て恥ずかしい思いをしないよう、ルールや礼儀、身だしなみなどを教える 他人を傷つけたり、命にかかわる危険なことをしないよう教える 子どもにお金の大切さを教える</p>
<p>因子Ⅳ「子育てや教育に関する費用の管理」：3項目 子どもの生活費や教育費のために、節約を心がけている 子どもが生活費や教育費のために、他の生活費をやりくりしている 子どものために親のぜいたくは控える</p>

3) 質問内容

① フェイスシート

回答者の属性として、年齢、就業状況、子どもの数、対象の子どもの性別、対象の子どもの兄弟姉妹の順序、年少入園前の保育利用の有無の7項目である。

② 質問

「『母親の役割』は今のあなたにとってどのようなものだと思いますか？ 個人的な意見でかまいませんのでいつくままでご自由にお書きください」という教示のもと回答してもらった。

4) 倫理的配慮

対象園の園長に調査の詳細を記した依頼状と質問紙のサンプルを渡し、さらに調査について口頭で園長に説明をして同意を得た上で実施した。質問紙のフェイスシートには調査の目的と個人情報の保護を記して無記名とし、ID番号によって管理した。フェイスシートには調査への同意を確認する項目を設け、調査に同意を得られた対象者の質問紙のみ分析に利用した。

質問紙の分析結果については、各園の園長と母親たちに資料を配布してデブリーフィングを実施するよう計画した。資料には「調査協力のお礼」、「調査目的」、「問い合わせ先」、「個人情報の扱い」を記載した。調査結果を知りたい回答者には報告書請求をしてもらい、調査結果の報告書を送付する旨も記載した。さらに、筆者が所属していた大学の倫理項目についてチェックを行い、大学から届け出が受理されている。

3. 結果と考察

1) 質問紙の回収状況と調査協力者の特徴

年少母では、107部を配布し、回収した総数は90部で、回収率は84.0%であった。そのうち同意がない1部と無回答の20部を除外し、70部の質問紙が分析可能であった。年長母では141部を配布し、回収した総数は120部

で回収率は85.1%であった。そのうち不備がある6部と無回答の20部を除外し、94部の質問紙が分析可能であった。それぞれの母親の年齢の平均、子どもの数、就業の状況については以下の通りである。

① 年少母の基本的属性

母親の年齢の平均は35.4歳 ($SD=4.95$) で、23歳から46歳であり、年齢不明が3人だった。子どもの数の平均は2.1人 ($SD=0.92$) であり、1人から6人の子どものを養育しており、そのうち第一子は34人 (40.5%) で、不明が1名であった。対象者84人のうち、フルタイム勤務4人 (4.0%)、パートタイムやアルバイト22人 (26.2%)、時短勤務3人 (3.6%)、フリーランス5人 (6.0%)、産休育休中4人 (4.8%)、不明が1人 (1.2%) で、45人 (53.6%) が専業主婦だった。

② 年長母の基本的属性

母親の年齢の平均は37.5歳 ($SD=4.89$) で、24歳から48歳であり、不明が2名であった。子どもの数の平均は2.0人 ($SD=0.87$) であり、1人から6人の子どものを養育しており、そのうち第一子は45人 (40.5%) で、不明が1名であった。対象者111人のうち、フルタイム勤務1人 (1.8%)、パートタイムやアルバイト34人 (30.6%)、時短勤務6人 (5.4%)、フリーランス2人 (1.8%)、その他2人 (1.8%) で、65人 (65.0%) が専業主婦だった。

2) 分析 I 親役割意識に関する記述回答の結果と考察

① 年少母の記述回答の結果

分析の結果、切片化された記述の総数は292であり、対象部数70部を上回っている。分析の結果、全部で13のカテゴリーが生成され、さらにこれらのカテゴリーから【安全基地になる役割】、【養護する役割】、【教育する役割】、【時間や感情を共有する役割】、【その他】の5つの大カテゴリーが生成された (表2)。以下、大カテゴリーごとの結果の詳細である。

①-a 安全基地になる役割

【子どもに安心を与える】：母親が子どもに安心感を与

える意味内容の記述が共通している切片でカテゴリーが生成され、これを〔子どもに安心を与える〕と名付けた。

〔子どもを受容する〕：母親が子どもの存在や感情、要求を受け入れる意味内容の記述が共通している切片でカテゴリーが生成され、これを〔子どもを受容する〕と名付けた。

〔子どもを見守る〕：母親は子どもに対して直接行動を起ささないが、子どもから関心を逸らさず見守る存在であるという意味内容の記述が共通している切片でカテゴリーが生成され、これを〔子どもを見守る〕と名付けた。

これらの3つのカテゴリーの記述は「母親は子どもの行動に直接手出しはしないが子どもの情緒を大切に安心感を育む」という意味内容が共通している。よってこれらのカテゴリーを1つにまとめた大カテゴリーが生成され、これを【安全基地になる役割】と名付けた。

この大カテゴリーは寺藪¹⁰⁾の因子Ⅰ「子どもの発達を促す関わり」の項目に複数対応するが、本研究の分析からは子どもの発達を促す要素は見出されなかった。なお、回答者70人中48人(68.6%)にこの大カテゴリーに該当する記述がみられた。

①-b 養護する役割

〔子どもの基本的な生活習慣の確立に向けて援助する〕：母親が子どもの成長や健康を考えて食事をはじめ衣食住の世話をする意味内容の記述が共通している切片でカテゴリーが生成された。この内容は寺藪¹⁰⁾の因子Ⅱに対応するためこのカテゴリーを〔子どもの基本的な生活習慣の確立に向けて援助する〕と名付けた。

〔子どもの安全を守る〕：子どもの生命の安全を守る意味内容の記述が共通している切片でカテゴリーが生成され、このカテゴリーを〔子どもの安全を守る〕と名付けた。

〔子どもの補助をする〕：子どもがまだ自分1人でできないことを母親が補助する意味内容の記述が共通している切片でカテゴリーが生成され、これを〔子どもの補助をする〕と名付けた。

これらの3つのカテゴリーは、日常生活で子どもがまだ1人でできないことを母親が補助する意味内容が共通している。よって、これらの3つを【養護する役割】という大カテゴリーとした。

①-c 教育する役割

〔社会生活に向けて教育する〕：子どもが社会で生きていくにあたって必要な世の中のルールを教える意味内容の記述が共通している切片でカテゴリーが生成された。このカテゴリーは寺藪¹⁰⁾の因子Ⅲ「社会生活に向けての教育」の項目に対応しているため〔社会生活に向けて教育する〕と名付けた。

〔子どもの将来に向けて教育する〕：子どもが持っている可能性を自分で見つけてそれを将来発揮できるようにサポートする意味内容の記述が共通している切片でカテゴリーが生成され、これを〔子どもの将来に向けて教育する〕と名付けた。寺藪¹⁰⁾の因子項目と対応するものは見出されなかった。

〔子どもの手本になる〕：母親が子どものお手本になることや母親の考えを子どもに伝える意味内容の記述が共通している切片でカテゴリーが生成され、これを〔子どもの手本になる〕と名付けた。このカテゴリーは寺藪¹⁰⁾の因子Ⅰ「子どもの発達を促す関わり」の項目に対応するが、本研究の分析からは子どもの発達を促す要素は見出されなかった。

〔子どもを怒る・叱る〕：母親が子どもに対して教育やしつけのために怒ったり叱ったりする意味内容が共通している切片でカテゴリーが生成され、これを〔子どもを怒る・叱る〕と名付けた。寺藪¹⁰⁾の因子の項目と対応するものは見出されなかった。

〔子どもの教育全般〕：教育の意味内容を持つが教育の内容には詳しく言及していない記述があり、これらをまとめてカテゴリーとし、〔子どもの教育全般〕と名付けた。

これらの5つのカテゴリーの記述は、母親が子どもを教え導く意味内容が共通している。よって、これらの5つのカテゴリーを1つにまとめた大カテゴリーが生成され、【子どもを教育する役割】と名付けた。

①-d 時間や感情を共有する役割

〔子どもと時間や感情を共有する〕：母親が子どもと時間や感情を共有する意味内容の記述が共通しているため、このカテゴリーを〔子どもと時間や感情を共有する〕と名付けた。このカテゴリー以外に類似性があるカテゴリーが生成されなかったため、このカテゴリー単独で大カテゴリーが生成され、これを【子どもと時間や感情を

共有する】と名付けた。また、寺藪¹⁰⁾の因子Ⅰ「子どもの発達を促すかかわり」に類似する項目があったが、本研究の分析からは子どもの発達を促す要素は見られなかった。

①-e その他

他の記述とは意味内容に類似性が見られない切片をまとめ、これを【その他】と名付けた。

② 年長母の記述回答の結果

切片化された記述の総数は284であり対象部数108部を上回っている。分析の結果、全部で10のカテゴリーが生成され、さらにこれらのカテゴリーから【安全基地になる役割】、【教育する役割】、【基本的な生活習慣の確立に向けて援助する役割】、【その他】の4つの大カテゴリーが生成された。以下、分析の詳細である。(表3)

②-a 安全基地になる役割

大カテゴリーの生成過程は年少母の①と同様である。回答者94人中69人(73.4%)にこの大カテゴリーに該当する記述がみられた。

②-b 教育する役割

〔子どもの社会生活に向けて教育をする〕：分析の結果の詳細は、年少母のcと同様である。

〔子どもの将来に向けて教育する〕：子どもの自立や自己実現のサポートをする意味内容の記述が共通している切片でカテゴリーが生成され、これを〔子どもの将来に向けて教育する〕と名付けた。このカテゴリーは寺藪¹⁰⁾の因子Ⅱの項目にはみられなかった。

〔子どもの心身の健康のための教育〕：母親が子どもの心身の健康のために日常生活の基本を教える意味内容の記述が共通している切片でカテゴリーが生成され、これを〔子どもの心身の健康のための教育〕と名付けた。このカテゴリーは寺藪¹⁰⁾の因子Ⅱの項目と近いが、寺藪の項目は「援助」に重きがおかれているのに対し、本研究の分析からは「教育」の要素がみられた。

〔子どもの手本になる〕：母親自身が子どものお手本になる意味内容の記述が共通している切片でカテゴリーが生成され、これを〔子どもの手本になる〕と名付けた。

年少母と同様に寺藪¹⁰⁾の因子Ⅰの項目と対応するが、寺藪の項目は「発達を促すかかわり」として扱われているのに対し、本研究の分析からは発達を促す様子は見受けられず、「教育」の要素がみられた。

〔サポート全般〕：サポートの具体的な内容についての表記はないサポートに関する切片からカテゴリーが生成され〔子どものサポート全般〕と名付けた。

これらの5つのカテゴリーには子どもを教育する意味内容の記述が共通している。よって、これらの5つのカテゴリーを1つにまとめた大カテゴリーが生成され、これを【教育する役割】と名付けた。

②-c 基本的な生活習慣の確立に向けて援助する役割

母親が子どもの健康を考慮して日常生活の世話をしている意味内容が共通している切片からカテゴリーが生成された。寺藪¹⁰⁾の因子Ⅱ「基本的な生活習慣の確立に向けた援助」の項目に対応しているため、これを〔子どもの基本的な生活習慣の確立に向けた援助〕と名付けた。なお、他に類似性のあるカテゴリーは生成されなかったため、このカテゴリー1つで大カテゴリーとし、これを【基本的な生活習慣の確立に向けて援助する役割】と名付けた。

②-d その他

他の記述とは意味内容に類似性が見られない記述をまとめて【その他】と名付けた。

③ 親役割意識に関する記述回答の考察

以下、「年少母と年長母の親役割意識の分析で生成された大カテゴリーの比較」と「子育て期母親役割尺度の項目と本研究の比較」である。

③-a 年少母と年長母の親役割意識とその比較

安全基地になる役割

本調査の参加者の約70%に【安全基地になる役割】に該当する記述がみられた。年少母の記述のなかには「幼稚園で新たな生活を送っているなかで、いろいろ頑張っているなど感じることは多いので、帰った時にはホッと安心できる場所、存在でありたいと思う(年少母)」など、入園間もない子どもが安心して幼稚園に通うことができるよう心理面のフォローをしている様子がわかる記述が

表2 年少母の親役割意識分析結果

			回答者数 70人	
大カテゴリー	カテゴリー	記述例	該当者数(人)	%
安全基地になる役割	子どもに安心を与える	“子どもに安心感を与えること”, “子どもの安全基地でありたい”, “子どもが安心して外に出ていけるようにいつでも帰れる場所”, “子どもの前では笑顔でいることをこころがける”	48	68.6%
	子どもを受容する 子どもを見守る	“ありのままを受け入れる” “子どもの行動を温かい目で見守る”		
養護する役割	子どもの基本的な生活習慣の確立に向けた援助	“成長過程の衣食住を整える”	26	28.9%
	子どもの安全を守る	“事故やけがに気を付け, 子どもの安全を守ること”		
	子どもの補助をする	“困っていたら助けてあげる”		
教育する役割	子どもの社会生活に向けた教育	“良いことと悪いことの区別がつくように教えること”	29	32.2%
	子どもの将来に向けた教育	“色々な経験をさせてあげることで自ら方向性を見つけられるようにすることを念頭におく”		
	子どもの手本になる	“人付き合いや言葉遣い, 人としてのお手本になる存在”		
	子どもを怒る・叱る 子どもの教育全般	“子どもも1人の人間として, 子どもと思わず怒る” “教える”, “勉強”		
時間や感情を共有する役割	子どもと時間や感情を共有する	“子どもにとって大事な遊びを一緒に楽しむ”	8	8.9%
その他	その他		4	4.4%

表3 年長母の親役割意識分析結果

			回答者数 94人	
大カテゴリー	カテゴリー	記述例	該当者数(人)	%
安全基地になる役割	子どもに安心を与える	“子どもに安心感を与える”, “外に出て不安なことがあっても, 帰って安心できる存在になりたい”, “笑顔で明るく!!”	69	73.4%
	子どもを受容する	“成長して悩みが出てきたら受け止めてあげることが母親の役割かなと思う”		
	子どもを見守る	“子どもの成長を見守る”		
教育する役割	子どもの社会生活に向けた教育	“社会生活を学ばせてあげる”	52	45.6%
	子どもの将来に向けた教育	“子どもが自立できるように育てること”, “将来のため, 今できることを提案し, 選択できるようにしてあげる”		
	子どもの心身の健康のための教育	“正しい生活リズムなど, 基本的なことを身に付けさせること”		
	子どもの手本になる	“子どものお手本”		
	子どものサポート全般	“子どものサポート”		
基本的な生活習慣の確立に向けた援助をする役割	子どもの基本的な生活習慣の確立に向けた援助	“健康な体づくりに必要な食事の提供”	16	14.0%

みられた。また, “母親は安心感を与える存在 (年長母)”, “安全基地となること (年少母)” など, 「アタッチメント (愛着)¹³⁾」を意識していると思われる記述も年少母・年長母ともに共通してみられた。

これらの記述から, 幼稚園児の母親たちにアタッチメント理論などの心理学の知見が浸透している様子がうかがえる。他の対象との近接関係を維持したり回復したり

しようとする生体の傾向をアタッチメントと呼ぶ。「安全基地 (secure base)」は愛着理論の主要な概念の1つで, Ainsworth¹⁴⁾は「探索のための安全基地」と述べている。母親たちの記述から, 母親たちは子どもが幼稚園に通うことを「探索の場に出る」と捉え, 母親の存在や自宅を「安全基地」と捉えていると推察する。Bowlby自身はアタッチメントの対象は母親だけではないと否定している¹⁵⁾が,

わが国ではアタッチメントの対象は母親であることが強調されやすく、親子関係や子どもの問題を母子のアタッチメントに起因すると考える傾向がいまもまだ根強くみられる。なかには、“子どもに安心を与える存在であればいいと思うが、なかなか難しい（年長母）”など、アタッチメントを意識することによる母親たちの負担や葛藤がみられる記述も存在した。母子のアタッチメントを過度に強調することは子育て中の母親にプレッシャーを与える懸念があり、慎重になる必要がある。

また、感情労働に該当すると考えられる記述もみられた。“笑顔を大切に保ち続けることが今の私の役割だと思っている（年長母）”，“子どもの前では笑顔でいることを心掛ける（年少母）”など、笑顔を心掛けて子どもの心に寄り添おうとする様子が年少母・年長母の記述に共通して見られた。感情労働はA. R. ホックシールドが提唱した概念¹⁶⁾で、にこやかな微笑みや細やかな思いやりなど、感情表出それ自体が労働となることを指す。感情労働がバーンアウトを引き起こしうることが労働者と対象とした調査で明らかになっており¹⁷⁾，【安全基地になる役割】を意識している母親たちにもバーンアウトが起こる可能性や、バーンアウトに近い状況に陥る懸念があるのではないだろうか。

教育する役割

分析の結果、年少母・年長母ともに【教育する役割】が生成された。しかし、年長母では〔子どもの心身のための教育〕が生成されたのに対し、年少母母では生成されなかった。一方で、年少母の記述からは【養護する役割】が生成されている。よって、年少母母は子どもの心身のことに「養護するもの」と意識し、年長母は「教育するもの」と意識していることがわかり、母親たちは子どもの発達に合わせて親役割意識を変化させていると推察する。

さらに【教育する役割】の切片の割合を年少母と年長母で比較すると、年少母は22.8%、年長母は35.5%であり、年長母の方が切片数の割合が高い。年長母の調査を実施したのは卒園を控えた時期であり、母親たちが子どもの小学校入学へ向けて教育を意識していることが反映されているからではないだろうか。“安心して羽ばたけるようにサポートすること（年長母）”など、小学校入

学を意識していると思われる記述があり、【安全基地になる役割】と同様に子どもの状況に応じて親役割意識を変化させている様子がうかがえる。

年少母においても、“言うことが理解できるようになってきたら、正しいこと間違っていることも教えてあげる（年少母）”といった記述があり、子どもの発達に合わせて指導を調節していることがわかる記述もあった。これらのことから、母親たちは子どもの将来のことを見据えて、子どもの発達の状況に応じて子どもへの教育を意識していることも推察される。

基本的な生活習慣の確立に向けて援助する役割、養護する役割

年少母の〔子どもの基本的な生活習慣の確立に向けた援助〕は〔子どもの安全を守る〕〔子どもの補助をする〕というカテゴリーとともに統合され、【養護する役割】という大カテゴリーが生成されている。一方で、年長母では【基本的な生活習慣の確立に向けて援助する役割】という大カテゴリーが生成され、〔子どもの安全を守る〕、〔子どもの補助をする〕のカテゴリーは成立しなかった。

年少母にだけ〔子どもの安全を守る〕と〔子どもの補助をする〕が成立したのは、入園間もない年少児はまだ大人が身のまわりの安全に気をつける必要があり、子どもがまだ自分1人でできないことの補助が必要な段階であるからだと考えられ、“事故やけがに気を付け、子どもの安全を守ること（年少母）”などの記述がみられた。それに対し、卒園の頃の年長児はある程度身のまわりの安全に気をつけられるようになっており、大人の補助が無くても自分1人でできることが増えている段階にあるため、年長母の記述からは〔子どもの安全を守る〕、〔子どもの補助をする〕というカテゴリーは生成されなかったと推測する。

また、年長母では【基本的な生活習慣の確立に向けて援助する役割】が生成されたのは、子どもが自分自身でできる身の回りのことが増えている時期だが、食事は子どもが1人で用意するのはまだ難しいため、母親たちは子どもの食事作りを役割として意識していると推察する。同様に、まだ子ども自身で自分の健康を考えて睡眠時間の管理などをするのは難しいので母親が役割として意識しているのではないだろうか。

これらの結果から、母親たちは子どもの発達の状況に合わせて親役割意識を変化させて子どもの日常生活をサポートしている様子が見られる。

時間や感情を共有する役割

年少母の記述から【時間や感情を共有する役割】という大カテゴリーが生成されたが、年長母の記述からは生成されなかった。入園前に母子が常に一緒に過ごしており、入園後に母親が子どもとの離れがたさを感じているが、この感覚は時間の経過とともに減少していくことが服部¹¹⁾のインタビュー調査から明らかになっている。よって、【時間や感情を共有する役割】は年少母のみに生成され、卒園の頃には役割として意識されなくなったと推察する。

③-b 子育て期母親役割尺度の項目と本研究の比較

寺菌¹⁰⁾が開発した子育て期母親役割尺度(表1)の「子どもの発達を促すかわり」因子は子どもの気持ちを受容する項目を含んでおり、本研究の【安全基地になる役割】とおおむね対応する。しかし、本研究で生成された【安全基地になる役割】は子どもの情緒の安定を目的としており、子どもの発達を促す要素は特に見られなかった。また、本調査では「安全基地」というアタッチメント理論に関連した用語がみられたのに対し、子育て期母親尺度の項目や、子育て期母親尺度の予備調査の自由記述の結果にはみられなかった。

これらの違いがみられた要因を2つの観点から推測する。1つには、近年の母親たちの情報源の特色が考えられる。ベネッセ総合研究所⁵⁾によると2015年から2022年の間にしつけや教育の情報源としてSNSが大幅に増えていることが明らかになっている。寺菌が子育て期母親尺度作成の予備調査⁹⁾を実施したのは2011年であり、本研究の調査は寺菌の調査から約10年経過した2021年に実施しており、ベネッセの調査時期とおおむね対応する。SNSを通じてアタッチメント理論が母親たちに拡がり、【安全基地になる役割】が親の役割として母親たちに意識されるようになったのではないだろうか。

次に、コロナ禍による影響も考えられる。本調査は2021年6月20日までのCOVID-19感染拡大に伴う緊急事態宣言解除後に実施されており、“今現在、心身とも

に健康に過ごせること(年少母)”といったコロナ禍であることを意識していると思われる記述もみられた。調査に協力した母親たちは全員が緊急事態宣言で幼稚園の休園という非常事態を経験しており、【安全基地になる役割】を通常よりも強く意識していたと推測することができる。

一方で、子育て期母親役割尺度の「基本的生活習慣の確立に向けての援助」は本研究の年長母でも【基本的生活習慣の確立に向けて援助する役割】という大カテゴリーが生成された。しかし、年少児では【基本的生活習慣の確立に向けて援助する役割】ではなく【養護する役割】という大カテゴリーが生成された。これは、子育て期母親役割尺度と本研究が対象とした母親の子どもの年齢が影響していると考えられる。寺菌¹⁰⁾は0歳～5歳の子どもがいる母親を対象としており、そのうち約半数が5歳児の母親である。よって、子育て期母親役割尺度では5歳児の母親の結果が反映されやすく、本研究の年長母の結果でも同じ傾向がみられたのではないだろうか。本研究の年少母の結果では「援助」よりも「養護」の意味合いが含まれており、親役割意識は子どもの年齢や発達の影響を受けると考えられる。

本研究では子育て期母親役割尺度とは全く違う傾向もみられた。子育て期母親役割尺度の「子育てや教育に関する費用の管理」に関する記述は1つも存在しなかった。寺菌は子育て期母親役割尺度作成の予備調査⁹⁾で「子育てや教育に関する費用の管理」を暫定的な役割領域と表記したうえで母親たちに自由記述を求めているため、「子育てや教育に関する費用の管理」が母親の役割として抽出された可能性も考えられる。

なお、寺菌は調査対象者に保育園児の母親も含めており、本研究は調査対象者を幼稚園児の母親に限定している。よって、両研究の調査対象者の違いからこれらの異なる結果が得られた可能性も考えられる。

3) 分析Ⅱ 親役割に関する意見

母親の記述を意味内容ごとに切片化したところ、年少母では総切片が202のうち27、年長母では総切片295のうち42が母親の親役割に関する意見だった。これらの記述のなかから、親役割による負担感や束縛感に関連す

る意見を抽出し、[ジェンダー平等・共働き時代の親役割意識]、[母親役割の責任・過剰・難しさ]、[母親役割不明]という3つの視点から考察を行う。

① ジェンダー平等・共働き時代の親役割意識

「母親の役割」ではなく「親の役割」として考えている。性差で親としての役割は変化しないと思う（年長母），“「父親」とか「母親」とか分けずに「親」じゃだめなのか（年少母）」といった、親役割のジェンダー平等に関する意見が年少母・年長母ともに共通してみられた。また，“仕事をしているので、「母親の役割」が自分にとっての全てではなく一部だと考えている（年少母）」といった、就業している母親の立場からの記述も存在した。

住田¹²⁾の幼児期の子どもをもつ親の役割意識に関する調査によると、父親と母親では認識している育児行為が父親と母親では異なっていたが、住田らの研究が発表されてから十数年の歳月が経過し、当時よりも母親たちは親の役割を母親と父親で区別しなくなっている可能性も考えられる。また、これらの記述から、親役割意識は母親の就労の状況の影響を受けている様子がうかがえる。

櫻谷¹⁸⁾は、「社会に進出する女性が増え、育児と両立させている姿は、専業の母たちの迷いを増幅させ、母親役割だけで生きることへの葛藤を芽生えさせている」と述べている。また、楠本⁶⁾は、「専業主婦は『育児に携わっている間に、世の中から取り残されているように思う』といったストレスを母親たちは感じている」と指摘している。櫻谷の調査から約20年が経過しており、当時よりも就業する女性が増え、幼稚園児の母親のなかにも就業をしている母親が増えており、親役割の葛藤が以前よりも起きやすくなっているのではないだろうか。

② 母親役割の責任・過剰・難しさ

“子どもが将来どのように育っていくのかは母親の役割や責任としてとても重要なものだと思う（年長母）”，“産んだ責任は果たさねばならない（年少母）”，など、母親としての役割に責任を感じている記述や，“母親の愛情が1番など、何でも母親でなければならないという世間の考えにうんざりしている（年少母）”，“社会が求める母親の役割が過剰であるように思っている（年長

母）”など、母親が社会から過剰な役割を背負わされていることを訴える記述がみられた。

これらの記述は、「今日の母親たちは主たる養育責任を負わされ、子どもがうまく育ったかどうかについても無限に責任を負わされている」という永田¹⁹⁾の指摘と一致する。山口²⁰⁾は「責任感に関する認知がより強固になり、やがて過負荷感を伴うようになった場合、それが育児ストレスの一因に発展しまう可能性も考えられる」と述べており、母親の責任感には育児ストレスの観点からも留意する必要がある。

③ 母親役割不明

“そもそも母親というものがよく分からない（年長母）”，“子どもを3人産んでも「母親の役割」はよく理解できない（年少母）”など、母親という概念や存在意義、役割について不明感を述べている記述がみられた。年長母の「母親役割不明感」は子どもとの分離意識に関連があることを服部²¹⁾は示唆しており、母親の役割に不明感がある母親には、母子分離の観点からも気にかけておく必要があると考える。

4. 総合考察と今後の課題

幼稚園児を養育している母親は幼稚園の3年間を通して【安全基地になる役割】を親役割として意識している傾向を本研究から示唆することができる。なかでも、「安全基地」というアタッチメント理論に関連した用語が使われている記述は、寺菌の調査⁹⁾¹⁰⁾ではみられなかった記述である。一方で【安全基地になる役割】の難しさを訴える記述もみられた。親役割の問題が子育てバーンアウトの危険因子の1つであることが明らかになっており³⁾、子育てバーンアウトの予防のためにもこの役割を母親たちが意識するようになった経緯や情報源を明らかにすることは、子育て支援の重要な知見になるだろう。また、この役割が今回見出されたのはコロナ禍による影響かどうかについても検証が必要である。

年少母と年長母の【教育する役割】の比較では、母親たちが子どもたちの状況や発達に応じて教育をしている様子がうかがえた。また、【養護する役割】と【時間や

感情を共有する役割】は年少母では生成されたが、年長母では生成されなかった。これらの結果から、やはり母親たちは子どもたちの状況や発達に応じて親役割意識を変化させていると考えられる。しかし、本研究では対象の子どもが第一子であるかは問わなかったため、上の子の育児経験が反映された親役割意識であることも考えられる。今後は対象の子どもを第一子に限定し、上の子の育児経験との関連にも着目をしていきたい。

また、本研究の分析Ⅰの結果と寺菌が見出した母親役割⁹⁾¹⁰⁾には違いがみられたが、違いがみられた原因は調査対象者の違いなのか調査をした年代の違いなのかは不明である。保育園児の母親にも同様の調査を実施して、幼稚園の母親の結果と比較する必要がある。

分析Ⅱの親役割意識に関する意見から、親役割に負担や葛藤がある母親の存在を改めて確認することができた。しかし、分析Ⅰで生成された大カテゴリーのそれぞれの負担感や葛藤については量的に明らかにできていないため、量的な検討も必要である。そして、過剰な養育責任を社会から背負わされていると感じている母親は現在もなお存在していることを本研究から改めて示唆することができた。母親たちが親役割を「過剰」、「社会から背負わされている」と感じる背景についても今後の課題とする。

付 記

本研究はPECERA Annual Conference 2021と日本保育学会第75回大会でポスター発表をしており、椙山女学園大学大学院修士論文として提出したものを一部加筆、修正したものです。研究に協力してくださった園の先生がた、お母さまがたに感謝いたします。

引用文献

- 1) 大日向雅美 (2016) [新装版] 母性の研究—その形成と変容の過程：伝統的母性観への反証—。ミネルヴァ書房。
- 2) 徳田治子 (2010) 親子関係の発達・変容 (1) —妊娠・出産・子育て期の親から見た子どもとの関係。岡本祐子 (編)。成人発達臨床心理学ハンドブック—親との関係からライフサイクルを見る。ナカニシヤ出版。
- 3) Moira Mikolajczak・James J. Gross・Isabelle Roskam (2019) Parental Burnout: What Is It, and Why Does It Matter? *Clinical Psychological Science*, 7(6), 1319-1329.
- 4) 木戸久美子・植村裕子・古谷嘉一郎 (2022) 特別記事 Parental Burnout (子育てバーンアウト) に関する文献レビュー。助産雑誌, 76(2), 170-179.
- 5) ベネッセ教育総合研究所 (2023) 第6回 幼児の生活アンケート (情報取得日 2023/06/22)
- 6) 楠本洋子 (2019) 母親の「親育ち」が養育態度に及ぼす影響。保育学研究, 57(1), 114-125.
- 7) 吉本文子 (2019) 「完璧」を目指す選択と評価のはざまで—専業主婦の母親の子育て観を中心に—。共栄大学研究論集 = *The Journal of Kyoei University* (17), 99-113.
- 8) 船橋恵子 (1998) 現代父親役割の比較社会的検討。山本正和 若尾裕司 (編)。父親と家族—父性を問う—。早稲田大学出版部。136-138.
- 9) 寺菌さおり・山口桂子 (2012) 「母親役割」尺度作成のための予備調査：自由記述式質問紙調査から。倉敷市立短期大学研究紀要 = *Bulletin of Kurashiki City College* (56), 33-40.
- 10) 寺菌さおり・山口桂子 (2015) 子育て期母親役割尺度の作成。小児保健研究 = *The journal of child health*, 74(4), 491-497.
- 11) 服部沙織 (2021) 我が子の幼稚園生活が母親に与える影響。日本保育学会第47回大会発表論文集, K90-92.
- 12) 住田正樹・中村真弓・山瀬範子 (2009) 幼児をもつ親の役割意識に関する研究。放送大学研究年報 (27), 25-33.
- 13) Bowlby John・黒田実郎・大羽泰・岡田洋子・黒田聖一 (1991) 母子関係の理論。岩崎学術出版社。
- 14) Ainsworth Mary D. (1967) *Infancy in Uganda: infant care and the growth of love*. Johns Hopkins Press.
- 15) 山本政人 (2010) 日本におけるアタッチメント研究の展開。人文 (9), 35-54.
- 16) 石川准・室伏亜希 (2000) 管理される心 感情が商品になるとき。世界思想社。
- 17) 古川和稔・井上善行・小平めぐみ・野村晴美・藤尾祐子 (2014) 介護職員の現状 (第1報) 感情労働がバーンアウトに与える影響。自立支援介護学 = *Japan Society of Care for Independent Living*, 7(2), 114-121.
- 18) 櫻谷真理子 (2004) 今日の子育て不安・子育て支援を考える—乳幼児を養育中の母親への育児意識調査を通じて (特集 子育て支援における参加者の育ちをとらえる)。立命館人間科学研究 (7), 75-86.
- 19) 永田えり子 (2000) 母親になるということ。藤崎宏子 (編)。親と子 交錯するライフコース。ミネルヴァ書房。83-106.
- 20) 山口雅史 (2010) 母親になるということ—母親アイデンティティを巡る考察—。あいり出版。
- 21) 服部沙織 (2023) 母親の幼児に対する分離意識の関連要因—幼稚園児の母親の育児経験と母親アイデンティティに着目して。人間発達学研究 = *Bulletin of The Graduate School of Human Development Aichi Prefectural University*, 14, 65-77.